

主 文

本件上告を棄却する。

理 由

被告人本人および弁護人石川滋の各上告趣意は、事実誤認、量刑不当の主張であつて、いずれも刑訴法四〇五条の上告理由にあたらない（なお、本件犯行の動機、凶器準備などの計画性、被害者が当時五〇年と二一年の無抵抗の婦女子二名であること、殺害の手段方法の残虐性、犯行後の行状、前科前歴、犯行時の年令など原判示の諸般の情状を総合して考察すれば、被告人の生活歴、家庭の事情、性格など被告人に有利な情状をすべて参酌しても、原判決が被告人に死刑を科した第一審判決を維持したのは、やむをえないところと認められる。）。

また、記録を調べても、同法四一條を適用すべきものとは認められない。

よつて、同法四一條、三九六条、一八一條一項但書により、裁判官全員一致の意見で、主文のとおり判決する。

検察官安原美穂 公判出席

昭和四七年一月二日

最高裁判所第二小法廷

裁判長裁判官	岡	原	昌	男
裁判官	色	川	幸	太 郎
裁判官	村	上	朝	一
裁判官	小	川	信	雄